

山とスキー

第五十一號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十四年七月三十一日印刷納本

大正十四年八月一日發行 (每月一回)
(一日發行)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號一十五第

記事

山岳及びスキーの身体に及ぼす影響と

それ等に依る負傷に就いての研究(承前)

アブローチに就いて

山の獵人

スキー即下駄下駄即スキー

春の燕岳へ

彙報抄録

寫眞版

奥穂高と其西尾根

唐澤谷から前穂高を望む

本田治吉〔一〕

伴素彦〔一四〕

板橋敬一〔一九〕

君一〔三〇〕

成瀬岩雄〔三二〕

岡部長量

大正十四年八月發行



奥穂高と其西尾根
岡部長量

山岳及びスキーの身体に及ぼす影響

それ等による負傷に就ての研究 (二)

本 田 治 吉

◆ ス キ ー

(スキーには大別して、山を本意とする方と、純粹のスポーツを本意とする方の二方面がある。スポーツ側は云ふ必要もないが、山黨は前章のベルグシュタイデルと同じ様に、やはり一ケの人間の相手を見出して、之と優を競ふものでなく、自然に憧れ、山に憧れて自然の中に突入して行つて、自然そのものゝ美を味ふと云ふ氣持から行ふ動作であるけれど、その身体的及精神的の緊張には變りはないと思ふ故に、同一視しておく事にする。)

(一) スキーの身體及内臟諸機關に及ぼす影響

彼のアルペン式スキー術の元祖、ツダルスキー氏の言を借りて云へば『スキーラウフェンの場合には、今自己の迂りつゝある大地の性質と自己の動作を、その瞬間的に意識して、それに相當せる體の平衡を保つ可く、筋肉も又瞬間的にアルバイトせしめる必要がある』斯ふしてスキーは只體の平均を保つ丈でも(尤もこの事が一番大切な事ではあるが)眞劍である。他のスポーツもそうかも知れぬけれど、スキーは下手すると命懸けである。而もスキーはその用ふる道具のスキーなるものからして、他の運動と趣を異にして居る。例へば體の平均を保つにも、兩側のストックに體を支へたり、或は

シユブルングやシユブング等の動作は全く他の運動に比し、特種な味を見せて居る。従つてその及ぼす作用や之に依て生ずる負傷も亦特種なものが多いと思はれる。

スキーラウフェンの身體及内臓に及ぶ影響は、今の所あまり良くは研究されていない様である。

一、心臓。大きな影響を受けるのは心臓であらうと思はれる。ヘンシエン氏が實際にスキー競走に出場せる選手に就て検査して、30%は心臓の左側の擴大を證明して居ると云ふ。(右側は非常に稀と云つて良い)其他心臓の肥厚も證明されて居る。氏は之を動脈中の血壓の上昇に歸因せしめて居る。

學者の統計によると、矢張心臓がその影響を受ける事の大なる事を明かに語つて居る。今その統計を見るに、四四人のスキーロイフェルに就ての實驗であるが、平均年齢 25.8J. 身長 1.71m. 體重 67.8kg 胸巾 24.9cm 心巾 12.1cm スキー年齢 13J. の人で平均 4—5mm 丈け心巾が大きくなつて居る事でも明である。

TABELLE 1

肺	中	心臓横徑	通	常	徑
cm	cm	cm	cm	cm	cm
20.1—22		11.5		10.5	
22.1—24		11.5		11.1	
24.1—26		12.1		11.7	
26.1—28		13.0		12.3	

TABELLE 2

体	重	心臓横徑	肺	巾	通常人ノ値	
					心臓横徑	肺
kg	cm	cm	cm	cm	cm	cm
56—60	11.4	23.2	11.3	23.5		
61—65	11.6	23.8	11.5	24.2		
66—70	11.8	25.4	11.7	24.7		
71—75	12.5	25.7	12.0	25.2		
76—80	12.6	25.7	12.2	25.6		

TABELLE 3

身	長	心臓横徑	肺	巾	普通ノ人ノ値	
					心臓横徑	肺
cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm
151—160	11.7	24.3	11.3	23.3		
161—170	11.9	24.1	11.5	24.2		
171—180	12.2	25.4	11.6	24.5		

TABELLE 4

心	臓	擴	大	%	
				cm	cm
cm	cm	cm	cm	cm	cm
0.6—1.0	1.1—1.5	1.0—2.0	2.1—2.5	2.6—3.0	3.1—3.5
2.8%	7.9%	5.0%	2.5%	18.2%	
44 Ski LAUFER					總和

(第一表は、肺中に對する心巾の値に就て並通の人との比較。第二表は、体重に對する心巾及肺巾の普通の人との比較。第三表は身長に對する同様の比較。第四表は即ち44人のスキローイフェルに就ての心臓擴大の%を示すものである。)

二、肺。心臓に對しては、あまり變化はないらしい。只何運動も同様であらうけれど、鼻で呼吸する事の必要を厳しく説いてある様である。

三、尿の所見。一時的ではあるが競争等の後には、尿中に蛋白質及びチリンデルがある。

(二) スキーによる負傷

スキーフワローレンに於ける外傷は、殆どその原因を墜落轉倒及びストックによる爲めに起るとして過言ではあるまい。従つて何も障害のない、而も粉雪の時の廣い野原に於ける怪我よりは、凹凸の大なる道とか、障害の多い坂とか、山地等に於て、而も重く水分を含める雪とか、ハウトを作れる雪の時等に於て起る怪我の方が、遙かに多い事は明な事である。次にスキーによつて來る負傷を場所によつて分けて述べて行かう。

一、頭部及び軀幹の負傷。他の手や足のそれに比して非常に少い。通常見らるゝのは矢張轉倒によるものが多い。轉倒して、頭や其他の部分の雪の外に露出せる岩や木の根等に打ち付れたり、或はハズミでストックのためになぐられたりストックの先で突かれたりして傷を受ける事が多い様である。

頭部。頭部に就て云つて見ると、轉倒の結果先に云つた様に、岩角や木の根に頭を打ち付れたりして、血腫を作つたりひどくなれば限がないけれど其の爲めに、腦出血を來す事あり、或は出血を起さぬ迄も、腦震盪を起す事等はあり得る事である。

眼。眼の負傷の可なり多いと言ふ事は注意に値する。轉倒した時持つて居たストックの先で眼を突いたりして、眼球の破裂を起す事がある。我々の仲間のF君のニセコアンヌブリに於ける不幸もこれに原因して居ると思はる。F君のそれは直滑降の時、非常なスピードの出で居るのに急にスキーが何かに引つかゝつて、その爲め體は前方に投げ出され、その拍子に持つてたストックの端で眼球を突いた爲めではあるまいかと、その時の傷の具合から想像されるのである。尙其他轉んだ時とか、他人と衝突した時に眼鏡が一寸した拍子でこはれて、却つてその爲めに怪我をする事が多々見られる。統計

をとつて見ると、どうしても眼鏡をかけて居る人の方が眼の怪我が多い様に思はれる。

其他。其他唇、齒、齒齦、或は鼻等に傷を受ける事は間々ある事であるが、學者の説によると、甲状腺に出血を來す事が非常に稀ではあるが存在すると云ふ。(突發的に或は血壓の高まれる結果)一寸耳新しい事である。そして、ジヤムピングの際背柱をいためる事があるとか、脾臓、肝臓の外傷や、外傷性と云つた様な事も云はれて居るが極めて稀な事であらう。

二、上肢の負傷。上肢の負傷は可なり多く見られるものである。多く轉倒せる場合に生ずる。(否殆どそれによつて來ると云つて良からう)例へば轉倒せる時、誰にも見られる事であるが、意識的或は無意識的に、その頭部或は體軀を保護する目的から、それを支へん爲めに手を延して、手を先につく、その爲めに起る事が多い。又他に持つて居たストック等の爲めにも負傷を受ける事がある。従つて大體轉倒せる爲による負傷と、ストックに依る負傷との二つに分ける事が出来る。

A. 轉倒による負傷。此の場合あまり特別なものはない。大體他の運動と似て居る。即ち關節の脱臼(肩關節、肘關節、手關節等の)骨折(上膊、前膊、拳、指)及之に伴ふ軟部(筋肉、皮膚等)の外傷等が考へられる。

特に注意に値する一云はばスキー特有と云つても良いのは、前膊の骨折で、常に前膊の前方三分の一の場所で折れる事であらう。原因は轉倒せる場合、深く手を雪中にさし込みて固定されてしまつた上に、向上から體重が加り、而もその體重の加はる方向が腕の骨の長軸と一致せず、多少外に向ふ爲めに、骨が折りまけられてしまふ爲めであらう。此の場合何れかと云ふと、尺骨よりも橈骨の方に多く見られる。

掌を擴げて突いた時、拇指或は掌骨の骨折を見る事もある。發生の動機はやはり同じと見て良からう。

B. ストックによる負傷。ストックに依る負傷で定形的のものは、主に掌骨の螺旋形骨折が多い。而もストックに依るものは云ひ條、矢張轉倒が附隨する事がある様に思はれる。

發生動機を考へるに、一つは直滑降の様に急速に這つて居る間に手が強直して筋肉の柔軟性を失つた時、一寸ストックの端が何物かにぶつかるとか、引つかるとかして、その力が持てる手にひびいて負傷を引起す事がある。或は軽く打たれた様な場合にも、又ドゥレーシユブルングの時ストックの端で掌を強く突く爲めに、そこに集る細かい骨を傷つける等も、

起る事がある。又一つは、走者が雪のない所か、或は氷つてギラ／＼した所で轉倒して、この際手で體を支へんとして、却つてストックが邪魔になつたり、ストックを離す暇なく怪我する事さへある。その場合ストックをシツカリ握り手をゲンコツに作つておく場合は、より危険と云はれて居る。

然らば之等の動機から如何なる負傷を來すかと云へば、斯ふした場合は掌骨の轉振及骨折等が多く、指骨に起る時は多く螺旋狀骨折である。

スキーをやる際、手袋の必要な事は明かな事であるが、之は單に寒冷を防ぐ爲めのみならず、手先の怪我を防ぐ爲めにも大きな意味を持つて居るものであつて、手袋なしにやつて、手に種々な怪我や、化膿等を見る事がある。

尙スキー登山の際、重きリュックを脊負つて深い雪の中を進む時、つひ兩方のストックの力を借りる事が多いものである。斯ふした事から之に關聯せる筋肉の痛を感じたり、時には腫炎を見る事があるけれども、一般に斯ふした上肢の負傷は下肢の負傷に比して論ずるに足らぬ程少いものである。

三、下肢の負傷。スキーに於ける負傷の中、十中八、九は下肢の負傷と云つて良い程、スキーの怪我と云へば足が多い。而て之の發生の動機は凡て轉倒に歸因して居るに云つても過言ではあるまい。

A. 腰部。此處の負傷は、ジャムピングによる事が多い。ジャムピングの事は今更自分が説明する必要もない。ジャムピングは、アブローチ、サツツ、フライト、ランディング及びアツプフアーレンの階程を経るものである。この際アブローチからサツツ、而てフライトに移る時、殊にフライトに於ては、ジャムバーは思ひ切つて體を前に懸ける。而かも之は前に曲けるのではなくて、體軸をグツト延ばしたまゝ前方へ傾けて上體の重心を前に落とす様にする。即ち之はランディングせる場合スキーが雪面に到着してそのまゝ迂り出す、その時のスキーに加ふる加速度と、上體の加速度を一致せしめて、從つて初に體の重心を膝關節の横軸より前におく様にするものである。若し體の重心が膝關節の横軸より後に來たさすると、上體は後に殘されてジャムバーは後に轉倒するに至る。之の運動を完全に行ふ爲めに、膝關節の筋肉を急激に使用する。從て之等の筋肉に、體重が非常な勢でかゝる状態となる。そしてその結果之等の筋肉（主にその附着部で前下棘と名付けられる點）に痛みを感じるものである。之は然し一寸した傷であつてあまり害にはならぬ。

此の部分の關節の脱臼は、殆ど無いと云つて良い位少いものである。

B. 大腿部の負傷。大腿部に來る負傷は、その骨折模様によつて、屈曲性骨折（横斷性）轉振性骨折、及び裂性骨折の三種に分けられる。

イ) 屈曲性骨折。大腿骨の中央部に起る。(柳先生の御話では下三分の一の所が一番多いとの事である) 多くスキージャムピングの練習中に見られるもので、而も十六歳以下の若い人に多いと云はれて居る。ジャムプは前にも書いた様にアプローチ、サツツからフライトそれからランディングに移り、而てアツプアールンするものであるが、此の場合にはランディングに移る瞬間に起るもので、その足の地に着く時のショックは非常に大きな力である。而もジャムピングの距離が長ければそれだけ大きなものである。故に普通之時テレマルクジツツエンと、體を前に傾ける事に依つて轉倒とショックを抜いて居る。之の場合、若し良く踏み付けられた、滑かな硬いランディング斜面であつて、そしてジャムバアが良く熟練して居て、テレマルクジツツエンの時、思ひ切つて前にかゝつて、膝を良く曲けて、ショックを抜けば害はない。然しまだ未練な人で、フライトで體がかたくなり緊張し足の關節が硬くなつてしまつて、丁度體が一本の棒の様になつて落ちる時には、體重と共にそれに飛んで來た加速度が全部足にかゝつて、足の骨は大腿骨の中點或は下1/3の所でボキリと折れる。一本の棒で之の實驗をして見ると、やはり大腿の中點部に相當して折れると云ふ事である。之を生理的に抗力減少部(Locus minoris resistentiae)と云ふ。

ロ) 螺旋狀骨折。滑走中突然烈しい阻止があつた時、或は急激な廻轉運動の時等に起る。例へば急激な小さなボーゲンとか、テレマルクシユブングとか、或は直滑降の最中急にスキーが何物かにつかへて、走者がその爲めに前方に投げ出されし時等、即ち体に急激な速力が付いての滑降中、或は滑降中に急激なドレーシユブング(クリスチニアとかテレマルクミカ)を爲す時、スキーが急に石の出た所とか木の根とかにつかへるか、又滑らかな粉雪から急に吹溜りの雪の中にスキーが入つた爲めに、スキーは急激に靜止するに至る。然るに上體はその作用を受けず元の速力のまゝドレーウングを續ける爲めに、足が振じられる様な具合になつて、割合にもろく骨が折れる理である。スタインマン氏は之の原理を二つのファクトールに分つてわかりやすく説明して居る。即ち

1. 走者のスキーの速力が非常なる爲め、體及體の各部にその惰性を及して居る事。
2. スキーが引つかゝつた爲め、スキーのトワイアンの部分を支點とする轉振的挺子の作用を體が受ける事。

の二つに分かつて説明して居る。又スモーレル氏はテレマルクシユブングによつて生ずる場合を次の如く説明して居る。

(この骨折はテレマルクの外にも多く起るらしい)即ちテレマルクシユブングの動作を分つて、二つとし

1. フレーウングの最初は意志の働に基く動作にして、

2. 本質的シユブングは先者の意志の働に基かず、體は全くパツシーフなものと云ふ。

而て骨折の起るは第二の本質的シユブングの間に起るものであつて、何かの故障でスキーが止つても、此の時は既に走者はそのシユブングを急に自ら中止する事は出来ぬものである。此處に於て體は前述の如くスキーのビンドウングの部分を支點として振れる爲め遂に骨折を見るものであると云ふ。此のテレマルクに於ける骨折は、先きの屈曲性骨折と異つて大腿の上部三分の一の點で折れる事が多いと云はれて居る。

(ハ) 裂性骨折。最も多く膝の内側の突起で、内上髌と名づけられる所に起りやすい。而してスキーフワールルの負傷の中此の點の負傷が最も多く、又通常多く見る爲めに馴れつこになつてしまつて居る位のものである。

此の發生動機は矢張、シユブリング、ボーゲン、シユブングステム等をやる時最も多く起るものである。そしてその多くは此の部分に附着せる内轉筋肉の過勞及あまり引張りすぎる事から、之の部分に裂傷を來したり、股鞘を名付くる筋膜で、大腿部の筋肉全體を包んで居るものがあるが、之の部分にも前記同様の力で裂傷を引起したりするものである。従つて之の多くは外側への廻轉に與つた方の足に於て多く見るものである。即ち右足のクリスチャニアでは右の足に多い。例へば右足でクリスチャニアをして、前足(即ち右足)が右廻轉しても、後足(左足)が之に伴はず、今迄通り眞直ぐ進む爲め足を開かれて前足を振られて、轉倒せる場合等に之の怪我が多く見られる事は衆知の事である。大體は無害のもので二三週後で運動が出来る様になるが、甚しいものになると、之の爲め膝關節鞘の裂傷から關節内に水がたまつて、關節炎を起す事もある。従つて之の點を(先きに柳先生が北海タイムスでお話になつた様に)外國ではシープンクト(Schippunkt)と云つて素人でも良く知つて居る相である。

C. 膝關節の負傷。今述べたシープンクトの負傷も之の部分に入る可きであらうが、それは裂性のもものとしてBに入れておいた。従つて今のシープンクトを除くと之の部分の負傷は割合に少い。

稀ではあるが重要なものは、下腿の脛骨が膝關節に於て後外方に脱臼する事があると云ふ事である。之の負傷は可なり

重傷で而も豫後があまり良くないものであるとさへ云はれて居る。

其の發生動機を考へると二つある。(一)急速滑降中、突然スキーの先が何物かに引つかゝるか、或は雪に突き差さつて體が之に次で前方に、叩きのめされた様に放り出される時。(二)後方へ向つて足を延せるまゝ進む時に、突然スキーが何かに引つかゝつて體がたはれる時(例ば燕返しの時失敗して倒れる時、或は例れぬまでも負傷の起る事がある。丁度挺子の原理に基いて。)

其他膝關節の粘液囊の出血から血腫を作つたりする事もある。

D. 下腿部の負傷。之の部分に於ても大體その模様によつて二様に分ち得る。(一)横斷骨折、(二)螺線狀骨折の二様である。

(イ)横斷骨折。主に脛骨及び腓骨の兩方共に折れる時と或は脛骨のみが折れる時とある。然し何にしろ、骨の中央より上部、即ち上半部に於て多く見られる。

其の發生動機を考へると、ハウトを作つた表面の硬い雪面とか、或は木の根等に運悪く轉倒せる時に起る。或は又横に轉倒せる時、他の足のスキーのカンテでその足を打つた時等起る。全くの屈曲性骨折である。

(ロ)螺線狀骨折。之の發生動機は、全く大腿のそれと同じと考へて良い。即ち足を固定して、前方、後方或は側方に而も不完全に轉倒する時に起る。故にこゝにはその理由に就ての詳しい説明は略す事にする。而して之の場合注意に値する事は、その骨折せる線の方向と、その起り易い場所である。大體に於て、脛骨は下三分の一部、而も下端に近く起り、腓骨は上三分の一而も上端に近く起ると云はれ、その兩骨折の距離の著しく離れて居る事である。従て骨折線は下内側より上外側へ向ふ線の場合が多い。然し之の反對の場合も少くない。

E. 足關節及踵骨部負傷。前記大腿部、下腿部に比して非常に少い。その中比較的多く見るものは、脛骨及腓骨の下端にある髌と稱するものゝ負傷であらう。而て外側の即ち腓骨の髌に多く來る。その發生機を見るに、直接作用によるものと間接作用によるものとある。前者は即ち何かに打たるゝとかする場合に起り、後者は多く足關節の場合に見らるのである。(この場合腓骨の螺線狀骨折をも伴ふ場合がある)

足穹隆即ちカバットの部分は、ビンドウング及びスキーの爲めに固定され、之による多少の保護作用がある爲めか、あま

り大した負傷は見受けられぬ。あつたとしても非常に稀で、それも足關節を過度に急激に引延した様な場合に、一寸した捻挫を見る位のものである。時には之の部分の粘液囊の出血から血腫を見る事もあると云ふ。

其他之の部分の筋肉の炎症症状として、伸筋の疼痛さか、臑鞘炎等を見る事があるが、別に大した意味もなく、少し手當をすれば間もなく治癒するものである。

E. ビンドウング及びその種類による負傷の位置及び種類に及ぼす影響。

スキ一のビンドウングの種類を先づ第一に分類すると、大体三種とする事が出来る。

(一) 強固強直なる種類のもの。(リリエンフェルデルのアルペンスキー、ビルゲリ式、ブラットマン氏のオーストリア式ビンドウング等)

(二) 非強固強直なる種類のもの。(ノールウエー式のフィットフェルド、エレフゼン等)

(三) 中間系のもの。(ラングリーメン等の種類)

實際的に見ると、あまりその種類多くして、又一方各人によつて、好き嫌ひがあつて、何れが非、何れが是とは断定し難いけれど、種々な経験やら、統計によつて見ると、矢張ツタルスキー式のビンドウングの方が、負傷に對しては危険は少い様に思はれる。ザール氏の研究によると、十二年間の中アルペン式スキーによる負傷は、大腿骨折のみで、其他のものは殆どない云つて良い位であつたと云ふ。其の反對に、リイメンによるものは多少危険性が廣いと云はれ、フィットフェルドによるものはより危険性が廣範であると云はれて居る。

然し之等は勿論ビンドウングそれ自身にも欠點はあるかも知れぬが、それよりも却つて、各系のスキー術の如何にあると思はれるのである。即ちそのテクニツクの主義から見てもツダルスキーは、ジツヘルにジツヘルを重ねて、術等も靜かに大事をとつて轉倒をせぬ事を主義とする關係上、危険が少ないのかも知れぬ。従つてノールウエー式スキー術は、非常に壯快な元氣に充ちた、而もシユブルングとか、シユブングとか云ふ離れ業をやる性質上、危険も多いのは明な事である。

(従つて快味に於て代償す) 而て之等による負傷の起る場所に及す影響を考へるに、膝は内側に起り、足關節は外側に於て起る云ふ、其の理由の詳しい事はまだ明となつて居らぬ。

結 論 (体育的價値)

元來前にも述べた如く、ベルグスタイゲン、及スキーで山を目ざして行く事は、他の運動と異なり、直接体育の發達を目的とするものではなく、自然其のものゝ心と、自己の心との融合に酔ふと云つた方が良いと思はれるものである。従つて他から見たら、他のスポーツの如く、汲々として目前の利益に走る(こう云ふ少し誤解を招くかも知れぬが)ものではなく、至つて呑氣相に自然の中に悠々として居る様に見えるかも知れぬ。故に之が身体に及ぼす体育的價値等に就ては問題にして居らぬかも知れぬ。然し之の体育的價値の側から考ふる時、實に大なる意味を有する事を知るものである。と云つてスポーツを本意とするスキーの側も斯ふした意味を全然度外視して居る理でない事は明な事である。

今之等山及スキーの身体に及ぼす影響を、最も多く影響を受くる心臓に就て(他の器管に就てはあまり明な比較なき爲めもあるが)他の種類の運動に比して考へて見るに、實にその大きな影響を蒙る事を知る。多くのスポーツの中、最も大きな影響を及ぼすはスキーであらう。ヘルクスハイマア氏の研究によると、その影響の大なるものから順に並べて次の如き配列を示して居る。即ちスキー、マラソン、中距離競走、水泳、重体操及ボクシングと云ふ風に。

多分ザール氏だと思つたが、氏の三九七七人に就ての實驗によると、表に示す如く(その對照として肺巾に對する心臓の平均質量を以てして居る)スキーが最も大なる値を示して居る。

TABELLE 1

肺ノ巾ノ 22.1—28 cm 場 合ニ 於テ	心 臓 質 徑 平 均 値											
	娛樂的 スポーツ	劍 闘	フット ボール	フット ボール	重体操	軟体操	行 山 旅 登	ス グ レ ッ シ ン グ	水 泳	自 轉 車	ボ ー ト	ス キ ー
22.1—24	11.1	11.1	11.5	11.1	11.3	11.3	11.3	11.8	11.5	11.0	11.5	11.5
24.1—26	11.7	11.7	11.7	11.8	11.8	11.9	11.9	11.8	11.9	12.2	12.1	12.1
26.1—28	12.3	12.4	12.3	12.6	12.4	12.4	12.7	12.4	12.6	12.9	12.7	13.0

上ノ三例ニ於テ心臓質徑ノ
大差ノ標準値ニ對スル差

—	0.1	0.4	0.4	0.4	0.5	0.8	0.9	0.9	1.0	1.2	1.5
---	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

之に依て各スポーツが心臓に及ぼす肥大の差が明となつて来る。之の表によつて見ても、スキー、ボート、自転車、水泳、レスリング、登山旅行等の順になつて居る。

TABELLE 2

Vergrößerung des Herzens mm:

	0,5-1 cm	1,1-1,5 cm	1,6-2 cm	2,1-2,5 cm	2,6-3 cm	3,1-3,5 cm	3,6-4 cm	Summe
ト	7.1%	16.2%	1.9%	0.7%	0.7%	0.7%		27.3%
スキー		2.8%	7.9%	5%		2.5%		18.2%
自転車	7.6%	4.7%	3.2%		0.8%		0.4%	15.3%
水泳	3.3%	5.4%	2.6%	2.4%	1.7%			14.9%
力	7.6%	6%	1.8%					11.0%
登山	1.6%	3.2%	1.2%		0.7%			9.4%
旅行	6.1%	3.5%	4.4%					9.3%
体	2.1%		2.0%					8.8%
操		1.1%	0.6%					4.4%
操				1.8%				3.1%
操								2.7%
操	0.3%							

第二の表による%の値を見るに、ボート、スキーの順になつて居る。之の表に依つても、スキー及山は（山はスキー程ではないが）重大な意味を有して居る理である。

他の運動は次に譲り、先づスキー及び山が如何なる理由によりて斯く大きな意味を有するかを見るに、スキー及び山に於ては矢張り、大なる労働による呼吸運動の甚しい爲めに、血管系統に對する荷重大なる爲めであらうと思はれる。何となれば、之等のものは大なる荷物、即ちリュックサック、スキー等を背負つて山に登る事による呼吸及び心臓の大なる荷重が考へられるからである。

●斯く、スキー及び山の身体に及ぼす影響の一端を見ても、之等の大きな意味を知り得る時、一寸考へるとあまりに影響のありすぎる事に不安を感じずには居られぬのである。従て却つて之等のものを危険視する傾向が大となる不安を思はずには居られぬのである。而て又今述べた様に斯く種々の負傷を列擧して来る時、尙この危険性に對する不安を深むる様に

思はるゝものである。

然し事實に於ては、かく危険視する必要はない。若しあまりに影響の大きな事を危険に思ふならば、今述べた例の大多數のものは、殆ど之を職業とし、従てそのアルバイトも普通のアマチュアの人比して、非常に大なるものと見るが至當である。従てそのアルバイトは度を越えたるアルバイトと見なければならぬのであつて、我々（自分は少くとも我々學生等のやる運動は、アマチュアのものとして見たのである。又實際プロフェツショナルなものとなつてはいけなないと思ふのである）は之等の運動を爲す時、良く程度を考へて、体のコンディションを考へて、良くその運動と自分の体との間に、コントロールを付けて運動を行つて行つたら、實に立派な結果を見るものではあるまいかと考へられて、それ等の危険視は不必要と云ひたい。

而も先きにも述べた様に、山に於ける大なる不幸の大多數は、自己の無責任に基く不幸である事を考へても、之等の不幸は或る程度迄は（天災によるものは別として）その當事者の充分なる注意と周到なる用意に依つて免れ得るものではあるまいか、而も山岳登山をやる人々には、萬一の場合は死をも覺悟してある事と思はるゝのであるから、之の死に臨める心を以て仕事に向つたら、之等の不幸は殆ど心配する必要はない位のものである。

私は常に思ふ事であるが『我々は山に對して之を侮つてはいけぬ。而て又恐れてはいけぬ。我々は山に對して畏る可きである』と。自然は我々に對して、濫い心を以て抱きしめてくれる母であると共に、一方又自然は冷い冷い心の敵であるからである。

スキースポーツに於ても、矢張り之の意味の言葉より他の言葉を自分は知らない。會つて自分は初めてスキーを習つた時、先輩から『スキーをやる時は常に緊張せる心でやらねばならぬ。邪念を起してはいけぬ。そして直滑降の時は少くとも十米以上の前方を見つめて細心の注意を忘るゝな』と教へられた。私は今でも此の言葉を忘れない。この言葉の意味をもつて擴張したら、スキーによる多くの負傷は（不可抗力のものは別として）免れ得ると思ふのである。少くとも宇頂天にならず、細心の注意を忘れねば、之等の危険に對する不安は除き得るものである。

偕て、斯ふして、之等の不安を凡て除き得る時、眼を轉じて、その齎らす効果を考へて見やう。

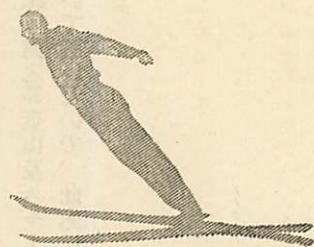
長い間の雪に埋れて、うすぐらい家の中に閉じ籠つて居なければならぬ冬の生活を考へて見ても、我々は眉をひそめず

には居られない。岡村君が何時ぞやタイムスに書いた様に、一度札幌の町を脱け出して、手稻の山に立つて札幌の空を眺めるが良い。而て札幌の町の上に黒い煙の棚引いて居るのを見て、如何に札幌の町の空氣の濁つて居るかを知り、そうした混濁の空氣の中から脱け出して來た事の有難さを知るが良い。斯ふした、純な、澄み切つた空氣の中に自づと邪念を忘れて、自然の中に浸る愉快は豈札幌のみに限らず、凡ての地方に於ても感ずる事實であらう。

尙又之等の運動は、他の一部の運動と異り、同時に体中の凡ての器管を使用する爲め、平均を保ちたる發育を得る事が出來ると思ふのである。小野寺氏はスキーの價値に就て、平均保持的作用の方面と及精神的方面に對しては愛國精神の發育効果をあげて力説されて居る。大野先生の御説の如く、我が日本人の体格の他國人に比しその劣れるを見るは、實に源を昔時平安朝時代及び元祿時代に發して居るものであらう。そして彼の雪の中に埋れて、永い冬の閑家の中に閉じ込められて、或は炬燵に或はストーブの周圍に、沈滞し切つた生活をなす事を省みる時、誰しも斯ふした生活の彼の平安朝時代の生活に共通せる點の多く存する事を見出すであらう。自分は斯ふした不衛生な、不合理な生活を打破して、人間の体育を向上さす上に於て、スキー或は山は如何に大なる意味を有して居るかを感ぜずには居られぬのである。

不肖自分は淺學にして、其他の重大な理由を見出し得ぬけれど、斯ふした意味に於て、自分は、山とスキーの少しも危険性に對する不安を感ずる必要のない事と、其の身体に及ぼす体育的効果の如何に大なるかを斷言し得る事を信ずるのである。

附記 尙之等登山及スキーに於て最も重要な凍傷に關しては、前に山とスキー（第二年目一四二頁）に於て不完全な書いて置いたので、此處には略す事にした。



アプローチに就いて

伴 素 彦

最近シユナイダー氏等によつて著はされた、モデルネス
キイシユボルトの中のアプローチに關する部分の大意をお
傳へしたいと思ひます。

立派なジヤムブの基礎があつて始めて美しい踏み切りが
出来るのである。アプローチは吾々にとつて、極めて大切
であつて、大いに注意を集中せねばならない。

ジヤムブの前には充分に氣を落ちつけて、決して走つてあ
がつたり、騒いだりしてはならない。深呼吸などは、ジャ
ムバーには缺くべからざるものである。

それから、飛躍の前に、シャンツエの長さ、傾斜、雪質、
殊にサツツする場所を充分に觀察しておかなければならな
い。此の事は、競技會の前に所謂トライアルが許されない

事が多い外國では、甚だ大切な事であるのである。

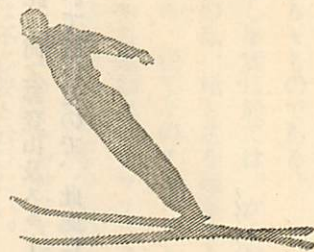
ジヤムブの際、或クラスに屬するジヤムバー達は、或る同
一の線からスタートしなければならぬ。

そして、この線は、當日スタイルジャツヂが雪の關係や、
ジヤムバーの技術を考へて定めるのである。

現在吾國では、スタート、ラインが一定されて居ないが、
早く實施されねばならないと思ふ。

ジヤムバーは、スタートの前に自分に適するスタイルの個
々の事柄に就いて、回想し、ジヤムブの實行、言はば、プ
ランを工夫せねばならない。

意志、エネルギーを顧み、自己の意識に暗示を與へてお
かなければ、良いジヤムブは、到底望まれない事である。



アプローチに就いて

伴 素 彦

最近シユナイダー氏等によつて著はされた、モデルネス
キイシユボルトの中のアプローチに關する部分の大意をお
傳へしたいと思ひます。

立派なジャムブの基礎があつて始めて美しい踏み切りが
出来るのである。アプローチは吾々にとつて、極めて大切
であつて、大いに注意を集中せねばならない。

ジャムブの前には充分に氣を落ちつけて、決して走つてあ
がつたり、騒いだりしてはならない。深呼吸などは、ジャ
ムバーには缺くべからざるものである。

それから、飛躍の前に、シャンツエの長さ、傾斜、雪質、
殊にサツツする揚所を充分に觀察しておかなければならな
い。此の事は、競技會の前に所謂トライアルが許されない

事が多い外國では、甚だ大切な事であるのである。

ジャムブの際、或クラスに屬するジャムバー達は、或る同
一の線からスタートしなければならぬ。

そして、この線は、當日スタイルジャツヂが雪の關係や、
ジャムバーの技術を考へて定めるのである。

現在吾國では、スタート、ラインが一定されて居ないが、
早く實施されねばならないと思ふ。

ジャムバーは、スタートの前に自分に適するスタイルの個
々の事柄に就いて、回想し、ジャムブの實行、言はば、プ
ランを工夫せねばならない。

意志、エネルギーを顧み、自己の意識に暗示を與へてお
かなければ、良いジャムブは、到底望まれない事である。

善いスポーツマンは、ジャムブの間に何を望んでも、凡てそれを成就し得るものである。

ボンヤリとスタートすること、此は吾々には、大禁物である。或時は不幸な事件をさへ起すであらう。

それから又後へ戻るがアブローチを滑る前に忘るべからざる事が今一つある。それは、シャンツエの端に立つて、見ることである。

そして、スタートするとき、シャンツエの端と直角に交はる方向に進める様に、充分自分の進む方向を定めておかねばならない。然らざるときは、曲つて飛びだし、空中で体が曲つてしまふ。体の前傾の過不足は、この曲つた姿勢よりも直し易いものである。曲つて飛び出して、轉倒しないのには、非常な努力と、豊富な経験とで處理しなければならぬのである。

スタートの方法は此處では省略することにする。

アブローチを滑る際、足の置き方に、普通二種ある。

脚を閉ぢて、狭いスプールで行くか、或は開いて、おいて広いスプールで行くか何れかである。

此は兩方とも正しい。そして、それぞれ、利益があるのである。

下降の始めには特に狭く脚をとぢることを注意すべきである。そして一方のスキーを5内至り程前方へ出す。

即ち右或は左足を前へ出さねばならない。それは、如何に吾々が確實に滑つて行くかと言ふことに關係するだけであるが。

そして、此の際ランディングの時にテレマーク姿勢になつた際、前方に出る足を前へ進めるのが普通である。殊にランディングの際、足の出難い人は、少し餘計に前へ進めるとよい。しつかりとぢた際に、スキーは、広い板の利益を示す。正しいスキーの保持は、かくの如きによつてのみ可能であらう。

此の點から、常に正しく、幅廣き、出来るだけ大きな靴をはくことが有利になつてくる。

一方の足を出すことも、このスキーをしつかり閉ぢるために必要なのである。尙又ラングリーメンピンディングを使用する大なる利益も兩スキーを締め揃へると云ふ場合に於て始めて正しく適用されるものである。

外國、少くとも中央ヨーロッパでは、ラングリーメンが用ひられてゐるやうである。

幅の広いシユプールのアブローチの姿勢は、普通ノールウエー人には多い。そして、中央ヨーロッパに於ても近年ノールウエー人の影響を受けてからよく見受ける様になつたがそれを以て、全てのノールウエー人が、幅の広いシユプールの姿勢をとるとは、言はれないのである。例外も少くない

のである。例へば、シャモニーの優勝者で、現代の第一人者であるチューリン、タムスは完全に脚を合せ閉ぢた姿勢をとつてゐる。

廣いシユプールの姿勢は、殊に短い、急な、アブローチに於て確實である。かゝるところは、地形の凸凹が認められる程なく、正しい方向が保ち易いからである。

然し、アブローチで、取つた様な、廣いシニプールで、サツツすると信じてはならないのである。

たこへ始め幅の廣いシユプールの姿勢をとつてもサツツするときは、スキーを閉ぢなければならぬ。

此の良い例としては、上腿をしつかりとち、下脚をX形に開いて、幅廣いシユプールで滑るけれども、シャンツエでは脚をとち、スキーを一枚の板の如くに合はせて、飛び出す方法である。此の方法は、確實なものであつて、獨逸の有名なジャムバーのエルンスト、バーダーによつて行はれてゐる。

初心者には、必要缺くべからざる確實さが、只幅廣いシユプールによつてのみ得られ又、廣いシユプールから、狭いシユプールに直し得るやうな大きなシャンツエでは飛ばないから、シユプールの狭い（揃へた）姿勢をさるべきである中央ヨーロッパでは、以前は幅の廣いシユプールはいけないとされてゐたのであつたが、今では、適當な觀察が下さ

れるやうになり、全く特別なスタイルと認められ、誤りとされるやうな事は最早なくなつたさうである。

クローチング、ダウンには四つのやり方が見うけられる。

(一)アブローチの最初の半分に於て、全く軽く、かゞんで、シャンツエに近くなつてから、次第に深い姿勢になる。

アブローチが六〇米あるものとすれば、シャンツエの前、十五米乃至二〇米で深い姿勢になるのである。

(二)徐々としたやり方でなく、漸進的でなく、やる人が多い殊にシャンツエの前で、急に動作して、深い姿勢になる人がある。此には賛成出来ない。アブローチに於ける突然的な動作は、ジャムプに不幸を起すことになるから。

(三)此は、ノールウエーススタイルである。直ちに深い姿勢になり、全アブローチをサツツの姿勢ですべるやり方である。此のやり方は、サツツに全勢力を集中するのに最も有利であると思はれる。ノールウエー人は、この様なやり方は、最も確實で、又風の抵抗を最もよく避けて、スピードが出ると言つてゐる。

(四)全アブローチをまつすぐに立つて、シャンツエで漸つと認められる程體を屈する人がある。此は全然誤りである。決して、成功したジャムプは得られない。

大なる注意が正しき、體の前傾にあらはねばならない體の前傾の度は、勿論多くの事情によつて變はつてくる

が、先づアブローチの傾斜によつて、前へかけ方が變つてくる。急であればある程、短ければ短い程、前へかけねばならない。同様に又、シャンツエの形も考へねばならぬ。下向きのシャンツエでは最も良く前へかけねばならない。アブローチでは、靜に、しかも大膽でなければならぬ。決して、恐怖のために、シユプールを亂す様な事があつてはならぬ。

吾々の眼は、シャンツエの端に、最初から注がれ、そして凡ての注意が、アブローチの間之に集中さるべきである。アブローチの長さは、色々である。例へば短いけれども、急でスピードの出るもの、又長くて、適當の傾斜のものなどがある。長さは、三〇米内至四〇米のものから、八十米乃至百米のものまである。

サツツの際に、ジャムバーに必要なスピードを與へるアブローチが良いアブローチである。ゆるい傾斜のものでは、良い、元氣のあるサツツは殆ど望まれない。スピードがなければ、體の前傾も又不可能である。

ジャムバーは、アブローチの際に、足全部で立つべきである。靴の裏は、その全部が、スキーの靴をのせる部分の上に、おかれねばならない、下脚はそのために強く曲けて、出来るならばサツツしていゝ角度にまける。

腕は軽く、體の兩側に下ける（全く横ではない少し前へ進

める）そして、シャンツエの端から、一五乃至二〇米の處で、體を強く前へかけるからそれに對して、平衡をとるために、腕をかたくのばし、前方へもつてゆく。

ノールウエースタイルでは始めから、この姿勢でよい譯である。

終りに、少し、普通に行はれてゐる誤について述べてみるアブローチでは、脚をこぢ、スキーを一瞬も、離れ離れにせず、グラ／＼させず、正しき方向から離すことのない様にすべきである。靜さゝ確實とは之によつて得られるからである。

頭を肩の間に引つこめたり、肩を強く張ることなどは、大きな誤りである。

この様な動作は、例へそれが恐怖心から行はれてゐるのではなくても、觀衆、殊に審判者にはぎうしても恐ろしがつてゐると思はれてしまふだらう。

脚もとぢ、スキーも、合はせてはゐるが膝をこぢない人があるが、此も誤りである。

膝の上に、手をおき、又は體の前で手を組んだりするのも正しくない。腕を肩の高さに體の横であける人もあるが此では、サツツのときに腕を使へず、又體及び脚の力も使へない、腕を弓形にまけ、手を體の横で上向きにしてゐる姿勢も嫌むべき姿勢である。

又こう言ふ誤つたやり方をしてゐる多くのジャムバーを見る。それはサツツの際に始めてやらずにアブローチの間に既に腕を後方に延ばす人々である。若し大きく腕を振りでもしたら、良いサツツの主な意味であるこのころの體の前傾は、不可能となるに違ひない。

又多くの人が、スピードを高めるために、時々急に起きあがるのを見る。此は誤りとは言はれないにしても、非常識な話である。幾分スピードが高められたところで、アブローチの姿勢が静でなくなり不均整となる。殊に短いアブローチの處では、多分減速な、サツツをするやうになるだらう。

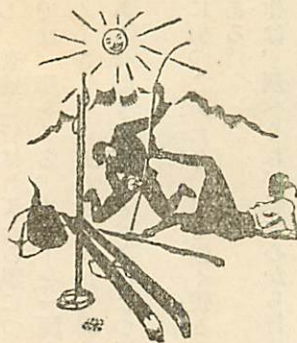
アブローチで非常な速度が出るために、信ずる事の出来ない程のレコードの出るアメリカの大レコード、シャンツエでは、ジャムバーは脚をとちて、深い豫めつけたシユブールをたどつて行く。それによつて右にも、左にも方向を逸しないことが出来るのである。

この様な所では、アブローチを踏みかため、平にしなくてはいい。レーキで掻く必要もない。只新雪のときに、正しい、深いシユブールをつけて、何時も残つてゐるやうにしておけばよい。

この様な深いシユブールは、滑降を確實にし、方向に注意深くしらしめ、サツツに全注意力を集中する可能性を與へ

る。

此のアブローチのシユブールは、吾々歐洲人に實際に行はれ且つ有効ではあるが、然し無條件的に必要と言はれない何故なら、三本溝をほつたスキーは、長い滑降をよく導いてゆくであらうから。





唐澤谷から前徳高を望む

岡部長量

山の獵人

板橋敬一

二月七日。

かゞやかしい月光の下に、神秘なきらめきを見せてゐる石狩の雪原を汽車は馳つて行つた。

御先祖頭巾をかぶつた母と、重いリュックを背負つた自分ととの三人は、月も落ちてやうやく夜の白けそめた頃自分達にまつては思ひ出の多い旭川の驛に下ろされた。

母は結婚する間もなくこの町へ移り住んだのだつた。自分は冬の最中にこの町で生れた。そして自分達の一家は自分の記憶にも残らぬ先にこの町を去つて、内地へと戻り行いて了つたのだつた。ともかく二十何年前の開拓者としての母にとつては、この町はなつかしいものであるにちがひなかつた。町はまださめ切らなかつた。活動小屋の灯がほつと上氣したやうに寒空に脈を打つてゐた。幌馬

車は薄闇の中をうごめてゐた。

十勝の池田行の汽車に乗る。圓いストーブがとろけるやうに燃えてゐる。それでも列車の中は寒かつた。朝霧を破つて山峽をさびしく汽車は進んだ。やがて山は見えず。太陽は山の肩に息づいてゐる。空はどんよりと鈍つてゐる空氣が凝結してゐるのだ。太陽までが氷つた空氣にとざされて苦しんでゐる。汽車は上富良野の驛に着いた。

飛澤病院に行つて温泉行の馬橋をたのむ。山々は微動だもしない不透明な空氣の中におそろしくおちついた、しかもはつきりとした空容をあらはしてゐる。旭岳の頂までが見える。十勝岳はまぢかに迫つて來てゐる。

『ほら、煙が噴き上つてゐるでせう。そしてその右手に大きな森が見えるでせう。その中なんですよ、温泉のあるの』

は。あんなに高いとこまで今日は登つて行かうと云ふので
すよ』自分は母に説明した。母は山の美にすつかりとうた
れてゐた。オブタテシケ、十勝岳、富良野岳、その麓をぐ
るつとかこんでゐる針葉樹の森は、惱んでゐる太陽と同じ
やうに限り知れぬ憂鬱をたゞえてゐた。馬橋の仕度も出來
る。自分だけはスキーをはいて馬橋にひきづられながら凍
てついた道を滑つて行く。母とSは小さな橋の上にもちよ
こなんと坐つてゐた。馬追ふ男はお人よしであつた。橋は
鈴をならして山へ向ふ。

ひさく冷たい朝だつた。馬はゆる／＼とあるく。こゝら
の農民の排泄物なのだらう。道の側に蛔虫が氷つたまゝ死
んでゐた。道はものうい。太陽は漸く力を得て氷つた空氣
もとけて來た。ミ、山々は次第にくつきりと白い膚をあら
はして來る。そして岸々は光り出した。空は澄んだ。カラ
バンの一隊のやうに森からは角材をひく馬の群が出て來た
橋はそれをさけて深い雪の中にもぐりこむ。角の行つたあ
と、又もとの道に橋を入れる。横だほしになつた。急いで
母をたすけおこす。茶屋はぢぎだつた。そこで休む。

晝になつて馬橋は森林帯に入つて行つた。Sもスキーを
はいた。山はかつきりと晴れた。谿からは雲さへ舞ひのほ
つてゐる。雪は白かつた。橋は樹帯を縫ふ。母にとつては
すべてが驚異だつた。山、森、雪、樹、橋、すべてが驚異

だつたのだ。母は子供のやうに、あらゆるものゝ中から美
を見出してはおどろいてゐる。橋道を橋に向つて二人は滑
つた。馬の鼻先でスキーをぐいととめる。道をはすれては
そこらのスロープを滑りまはる。シャッター一枚になつて處女
雪の中でしたか大きな樹林の中で数々のテクニクを示す
母にも橋ひく男にもスキーは大きな驚異だつたのだ。母は
その子の活動するさまをしきりと見守つてゐる。馬橋の鈴
の音はリン／＼と森にこだました。山腹のところ／＼に美
しい廣場を見出す。楡の純林の中に廣い雪原を見出す。樹
枝にほつたりと圓くかぶさつてゐる雪からは美しい虹が湧
いてゐる。五彩の環が浮き出てゐる。

十勝岳の温泉宿はもとのまゝに雪に埋もれてあつた。す
べての人がなつかしげに迎へて呉れた。昨日からTの連中
が三人で來てゐることも知つた。母を宿に残して二人はす
ぐに山に登り出した。森のすべてが美しかつた。美瑛岳が
尖つてゐる。樹帯をはなれると谿をへだてた向ふ側の山腹
にT達のスプールが見える。山々はかけつてゐた。陽が斜
にさしこんでゐる高原をかけめぐる。樹々は長い影をひく
やがて霧は山上におそつて來た。山を下る。深い樹林の中
に温泉宿をさがし出す。陽は紅の球となつて沈むところだ
つた。T達も歸つてゐた。互に山の幸を祝福する。上富良
野の市街地に火があがつた。火事だ。あり／＼と山の上か

ら望まれる。しばらくしてやんだ。山の夜は静かだつた。
I 達とトランプをやる。

二月八日。

朝、兎がとれた。後足がばかに長い純白の兎だつた。造材に來てゐるアッコが針金の輪をしかけておいてとつたのだ。

天氣はよくなかつた。母と他の三人を残してSと二人でとび出した。昨日のスプールを傳はる。雲は去來する。針葉樹と偃松と戰つてゐるあたりのさびしい谿をのほつて行く。針葉樹は段々とせごくまつて來て遂にはなくなる。あとは偃松の頭と岩だけの領分となる。雪の上を匍ふやうにして霧は飛んだ。高みへくく自分達はのほつた。寒さ、深い霧、雪を投げて見では一歩々々さすむ。断念してひきかへした。樹林の中の直滑降、すひ込まれるやうにして森の中に姿を消して了ふ。晝近くなつて食事をしに温泉に歸つた。途中三人のものがのほつて來るのに逢つた。

母は喜んで出て來た。ストーブのわきで母が驚くほど飯をつめこむ、茶をのむ。三人のものがドヤドヤと歸つて來た。そしてすぐに歸ると云つて、忽ちの中に支度をして山を下りて行つた。雪が降つて來た。

自分は宿の主人から獵銃を借りて、たつた一人で翁温泉

の谿にエゾライテウをうちに出かけた。山は全く静寂だつた。はじめて銃をもつた自分ではあつたが、それを肩にかけると妙に獵人の氣持が湧いて來た。耳は微妙にはたらくどんな音でも聞きのがすまいとミする。神經が尖つて來る小鳥がチ、とないても雪がばさつと落ちてもおどろいた。白樺の森のところどころには小鳥がことさらに群れてゐるところがある。と妙に緊張する。彈をこめて、銃く眼を光らせてあるく。獵人と云ふ役目を演じてゐる自分の姿に自分ながら微笑んで了ふ。段々と谿に近づく。麓の樹林の上を雲はあはたどしく飛んでゐる。空にも青が漂ふ。快晴を直觀した。自分には——獵人には獲物もなにもなくなつたひたむきに高みへと氣はあせつた。空は晴れた。氣は澄んだ。美しい尾根を銃を肩にして登る。富良野岳は冴えかへる。空は青に透く。雪に埋もれた樹林はこの上なく美しい兎がとび出した。少しばかりとんでは兩方の長い耳を立て、アルペン式のスキーの金具のなる音を聞いている。銃を向ける勇氣もなかつた。兎は一寸さんでは又不審さうにミどまつて聞耳を立てる。美しい環境、夢の國を自分はあるいてゐる。陽はかどやかしく光る。大きな傾斜。大きな樹々、黙々として登つた。昨日のスプールに出合ふ。脚下には地獄谷の壯麗、おそろしいまでに透徹した美しさ、ホロカメツトクヌブリ、カムイメツトクヌブリにつどく峯々

雪を被つた針葉樹の長い長い影、氷の冠、すべては斜光の中にあつた。昨日のスプールをつたつて高原を駆けまはつた。麓の樹林はものすごく浮き立つてゐた。ヌタツクも紫紺の中に古城のやうに浮ぶ。陽は傾く、山上に一人あつて自分はしきりと黙想し、しかも無上のよろこびにひたつた谿をすべる。森林の中を一氣に温泉にまで滑り降りた。

今日は本職の獵人があがつて来て、栗鼠の皮をはいでると温泉の人々は語つてゐた。夜、月は冴えた。雪片がキラ／＼と燐光をおびて輝いた。風呂には昨日の襦の男が入つてゐた。今日も亦のほつて來たのだと云ふ。昨夜、町に入る一里ばかり手前で火の手を見て馬を走らせたことを語つた。火事は町ではなかつたと云ふ。月光に山々が浮ぶ。自分のかけは雪道にくつきりと落ちてゐる。

二月九日。

昨夜あれまでに晴れたのに今日は亦朝から雪が降つてゐた。

山をしきりに思ふ。その美を思ふ。ほんごにすべてを棄て、山に住めるものならば——山は自分の全部なのだ。それ以上のものはないのだ。つきつめたさう云つた氣持が湧く。

獵人は足に赤い毛布をまいて、ツマゴをはいて出て行つ

た。嚴固な顔立と大きな体軀とをもつた氣持のいゝ人だつた。

Sは出ないと云ふ、で自分は又獵銃を肩にして外に出た。昨日の道をとる。谿を一つこえて平に出た。足下からエゾライテウがとび立つた。羽搏きにおどろいて鳥の行衛を見失つて了ふ。彈をこめて樹をめぐりながら鳥の姿をもごめた。獲物——見つからない。あきらめて更に森の深みへと進んだ。新しい兎の足跡を見出す。そのなまなましさを見ると急に獵犬のやうに追跡したくなつた。駆け出した、妙にうれしかつた。氣は躍つた、あとを逐ふ。一ぺんは高みへのほつた。と急に下つてゐる。もとの自分のスプールの上を兎はこんでゐる。ます／＼急に逐つた。谿に下る。横迂りでなだれおちる。谿底から一直線にのほつてゐる。苦心してスキーを運ぶ。雪はしづかに降る。襟元に入り込む汗みどろになつてのほる、いつか翁温泉の上の尾根に出たしきりと逐ふ。森を自由に兎はこんでゐる。自分も自由に駆けだした。兎は足跡で巧みにあざむく、同じ足跡をひきかへして横にそれてゐる山を左へ／＼と兎は行く、狭い尾根を上へ／＼とのほる。樹帯を離れる。霧はとぶ。兎の姿は見えない。死物狂ひで兎は登つてゐる。しきりと登つた。霧々、ひどい霧。足跡は下つた。ものすごい直滑降。大きな斜面をとぶ。灌木の間を縫ふ。森を縫ふ。兎はやつぱり姿

を見せない。左に切れて雪庇をのほつてゐる。足跡はおびえたやうに小刻に刻んでゐる。そして尾根を下つて樹帯に入つた。スキーは自由に動く。兎はもう谿にも下らなかつた。山の上へも逃避しやうとはしなかつた。森の中をぐるぐるとかけまはつてゐた。足跡はいろくると錯綜した。自分のスプールまでが到るところにあらゆる曲線を畫いてつゞいてゐる。同じところに幾度も出て来る。しかし自分にはどこの谿を、どこの平をどつちの方向に向つて駆けてゐるかはわからなかつた。眼の前には足跡だけがちらつてゐた。兎は巧みに逃げまはる。足は亂れてゐる。自分も根が盡きて來た。馬鹿らしくなつた。どこかで『オーイ』と叫ぶ聲がする。Sが滑つてゐる。それでも自分は尙しばらくは未練がましく足跡を追つた。しかし斷念した。Sのところはまだ行く。一時半だつた。湯を飲む、飯をかぢる。のんびりとした気分になつた。でも兎が眼の先にちらつく追跡する心理状態にはまりこんでゐた。Sと二人で歸つた足跡をふりかへつて笑ひ出す。

宿の人々は『お母さんが心配してゐらつしやいましたよ』と云ふ。最先に母に云つた『一匹の兎を四時間も追ひまはしたんですよ、實に愉快だつた』と云ふ。そしてしほるやうに汗がしみこんだシャツを着かへた。

早く家にあがる。夕方風呂に行く、湯氣は軒端に美しく

氷つてゐる。Sはあの美しい結晶のどんなこまかな部分でもちやんと六角の管からなつてゐるのだと云ふ。獵人が入つて來た。獸の足跡について話する。獵人は謙遜して語つてゐる『狐はどう云ふわけかあたりませんですな、これこそは大物なんで、慾が出て來やすでいけないんでせうな』名寄を出てオホーツク海をまはつて根室に行つて來たと云ふ。そこでこの壯快な白鳥狩の話をしてくれた。熊の話、栗鼠の話、山の人の氣持がびつたりと胸を打つて來る。湯からあがると澤山飯を食つた。『山にさへ來れば御前は元氣なんだね』と母は感心してゐる。自分も心からそれを感じずる。思ひ切り山の人間になれるのならと考へる。健康と幸福と。——と、蒼ざめた實驗室と顯微鏡が一方にはちらつく、山の人間になり切れたら——母は無心に微笑んでゐた隣の室では町から臨檢にあがつて來た巡査がしきりと酒を飲んでゐる。氣持がわるかつた。酔ひつづれて了つてゐた

二月十日。

母は今日山を下りると云ふ。一日先に旭川に行つてゐるそこで自分達を待ち受けると云ふ。自分は出来ることならいつまでも山におりたい位に考へた。

獵人も山を下る。見送りに玄關に出る『二ヶ月の豫定で家を出たんでさあ、もう半月になりますかね、これからで

すか、北見の置戸あたりに行くつもりですよ』妙にうらやましかつた。獵人は小さな袋と、カンヂキと鐵砲と彈以外には何も持たなかつた。防寒具すら祿になかつた。『この山ぢやとれませんでした。あんまりとれるとこだと慾が出て来て動きたくなくなりますがね、こうしてとれなければ又次の山へと行きますだからそれだけあるけるわけですね』と落ち着いて云つた。『又御縁があつたらさこかで御逢ひませう』そう云ひおいて獵人はとび出した。雪は降りしきつてゐる。獵人の姿は間もなく樹林の中へ、とめどもなく降る雪の中へ隠れて了つた。運命的な別離の言葉が妙に胸をさす。しばらくして宿醉の巡查も大きな外套に身を包んで黙々と山を下つて行つた。

馬櫃の支度も出来た。こゝの主人が馬を馳るのだと云ふ足が痛むまで昨夜から泣いてゐたその子も山を下ると云ふ母と病氣の女の子は乗つた。主人は赤いズボンをはいて馬の鼻をおさへた。雪は降つてゐる。母はさびしく山を下つて行くのだ。我儘な自分は強いて一日を山に残らうとする。實際のところすべてを棄て、まで山に居りたい。何物にもかへがたい健康を欲求してゐる。母は自分を生んだ町へ歸らうとしてゐる。『お母様、せめても御送りだけは致しませう』感傷的な氣持が湧く。温泉の人みなに送られて馬櫃は滑り出した。鈴をならしながら針葉樹林に入つて

行つた。自分は鐵砲を背負つてSと二人で馬櫃を追ふた。鈴はなる。悲しくなる。小犬がころがるやうにして後を追つてゐる構道はひざく滑る。馬も勢ひこんで走り出した。鈴はシャン／＼と鳴る。いくら行つてもきりがなかつた。もう少し、もう少し。ひきずられるやうにして二人は遠く

にまで送つて行つた。麓も近くなつた。『サヨナラ、サヨナラ』——櫃は勇ましく消えて行つた。樺者とした寒帯樹林の中に消えて行つた。最後の雪煙をあけてすひこまれるやうに消えて行つた。かすかな鈴の音だけが残る『アデュー、アデュー』すべては森に消えた。二人はさびしくもこ來た道をひきかへした。

白樺の大樹のすく／＼とのびてゐる廣場に出た。小鳥は多かつた。コゲラがた／＼、ルリに似た美しい鳥が眼の前でた／＼、白樺の膚とそして美しい鳥の羽艶と、自分はその美の本体をつきこめたくなつた。銃に彈をこめた。ねらひを定めた。はじめて打つのだ。ふるへながら引金をひいた極度の緊張、彈は不發だつた。小鳥はやつぱり無心につゝゐてゐる。二度と打つ氣はおこらなかつた。Sとはいつの間にか離れて了つてゐた。

耳をすまます、コト／＼啄木鳥の音が聞える。赤い腹の鳥が飛び立つた。それに近づいて行くと更に大きな音が聞える。すぐ眼の前に鼠色の腹毛を見せてクマゲラがた／＼いて

る。弾つた、音がした、銃口がぐつと下るのをおほえた
そして煙硝の臭がむつと来る。煙の彼方には毛がバツと散
つた。鳥はぶきやうな羽音を立て、低く飛び去つた。銃聲
は森にカン／＼と反響した。鳥のさえづりがひとしきりや
んだ。森は静かになる。いつか又啄木鳥の音が聞え出す。
羽だけはみじめに雪の上にとらばつてゐた。いつまでも身
体にまつはりついでゐる煙硝の匂をなつかしみながらはじ
めて弾を發射した獵人はしづかに森の中をさまよつた。森
のしづけさと自分とはいつの間にか一緒になつて了つてゐ
た。

どこからともなく小鳥の群が渡つて来る。白樺の高い梢
に別れ／＼にこまつてゐる。燕にも似たきれいな尾羽を
輕快な姿をもつてゐる。空色の羽をもつてゐる梢に群れ
て憩つてゐる姿、チイチイと可細くもすみ切つたなきごゑ
自分は靜かにそれに聞き入つた。遠くで人聲がする。自分
はむしろ人を避けた。木の間隠れに人の姿を覗つた。坂路
を鑛山の人らしいのが二三人登つてゐた。人聲は薄れて行
く。森は又靜寂にかへる。コト／＼と啄木鳥の音が無性に自
分を誘惑する。コゲラが三四羽も小枝の皮をはいでゐる。
ぐる／＼まはつてたゞいてゐる。無心のものよ。自分は樹
の下に近よつた。黒い腹の縞、そして頭の冠。ひどく可愛
い。森の奥からガラ／＼とうつろの中にひととき渡るやうな

音が聞える。そつちに近づく音はやむ。コツ／＼、コゲ
ラはつ／＼、耳をすます。傾聽した。靜寂、あまりの靜寂
ガラ／＼、更に奥から響く。樹間を縫ふて忍びよる。と又
音はやむ。自分は茫然として降る雪の中に立ちつくした。
音はやんだ。もとのまゝの靜寂が、そしてコツ／＼とコゲ
ラは無心にたゞく。森には風さへおこらない。ひきかへし
た。コゲラはもとの枝を萬遍なしにたゞきまはりながら鳴
き交はしてゐた。殘忍な銃はとりあげられた。銃先の前に
小鳥は無心にたゞいてゐる。煙があがつた。小鳥は悲鳴を
あけてにげた。森の靜寂はやぶれる。音ははねかへる。思
ひ出したやうにガラ／＼と音がした。再びあてもなく森
をあるいた。太陽はうすぐもつてゐる。頭上を黒い影が
すめる。カケスだ。獵人はめざとく見出した。しかし鳥は
奇怪な聲をふりしほつて逃けて行つた。自分も温泉に歸つ
て飯を食つた。

屋根から滑り下りる。温泉の人達はよろこんだ。眼を圓
くしておどろいてゐる。自分は更に屋根からとんだ。愉快
にとんだ。

夕に近くと二人で角材を出してゐる谿に下りた。簾出
しのひどい道を滑降する。森の中に焚火の煙がのほつてゐ
た。紫の煙がなつかしかつた。空は漸く暗れて來た。湯は
あかあかと樹林をもれる。焚火のわきに二人はジーツとす

はつて森の空氣をじつくりと吸ひ入れた。小さなホホジロが人を恐れもせずに近よつて来る。スキーを肩にもたせかけて二人は黙つて考へた。麓の樹林が光る。自分の周圍には紫の影がたゞすまふ。雪も森も紫の匂をおびる。虹が輪を畫いた。氣の澄んだ。山々はあらはれて來た。自分は白樺の純林に落陽のひとときを味はうとしてスキーをはきしきりと急いで見た。しかし早い雲足は忽ちにしてすべてを被ふて了つた。家に歸つた。

温泉宿の人々はいろいろと語した。母がその子を心配する心情、親と子との氣持、——そして嘗つて自分が書いたことのあるこの温泉の前の主人のフラウの話が出た。ジンゲルあがりだつたさ云ふその人は平氣で裸馬にまたがつてこの山を登り下りしたと云ふ。そしてあるときなどは、空の財布をおいて逃げ出した男を馬で逐つてつかまへたのだと云ふ。この森林の夜道を裕々と歸つて來たのを高張提灯をもつて迎ひに出た話、おそろしい膽力、その人が鑛山の人と關係して逃げて了つたのださうだ。雪女を想像して書いたことのある人、たゞられた温泉場の主人公として書いたことのある女、そうしたいささつがこの山を背景として行はれておつたのだ。

食後バインアップルを食ふ。去年の今日は十勝の頂に立つて幸福に酔つた日なのだ。Sと二人で去年のことを語り

合つて心ばかりの祝をする。風呂に行く、空は拭ふがやうに晴れてゐる。すみ切つてゐる、空は黒い。去年あの硫黄をかぶつて眞黄になつた十勝の山頂で仰いだ鋼色の空よりも更に黒い。その中に星だけが光る。黒水晶の空に寶石がきらめく。それでゐる月のはほつてゐる。山の雪の上を這つてゐる。空はあくまで黒い。

二月十一日。

又しても別離の日は來た。ほんまに山とは別れたくないこの一月にも十日足らずの合宿の後にこの山と別れることの辛さを味つた。そして又しても別れの日は來た。もう自分がこの山を訪れるもこれが最後かも知れない。スキーに自由な氣持をゆだねられるのも最後かも知れない。世の中と云ふものがすぐ傍に自分を待ちかまへてゐる。考へることは苦しかつた。一生を山で暮せるこゝなら、何物をすてゝもいゝのであるのなら、自分は今迄に餘裕もないのを無理につゞけて山に來ておつたことを思つた。無理のしつゞけを思つた。理由もなく世の中に縛られて繫れて了ふこれから先の極端な餘裕のなさを思つた。しかも母も漸く老いて來たことを思はせられた。

朝は早く起きた。ストロブのわきでしんみりと山の人々と別れの氣分にひたる。山稼ぎの柚夫達と一緒に飯を食ふ

と自分は一人でとび出した。お別れに美瑛岳の谿をのぞいて来ようと考へた。八時に家を出る。元山の鑛山事務所から深い雪をこいで登り出す。あたりのすべてが白つぽい薄光の中にとざされてゐる。極地の日光を思つた。いつもの道を谿に下り橋を渡つて白樺の林に入つた。小さな谿をいく曲りもして段々このほつて行く。スプールは美しく曲線を畫いてつゞいてゐる。優美だ。何とも云へない美だ。そして白樺の森からは遠ざかり行く。美しい森よ、もう御別れなんだ。初戀のあの朝にも似た乳色の印象、それとも永久にお別れなんだ。自分はもうちぎ月給とりだ。どうだスプールの美しいこと。そしてこの広い高原をたつた一人では自分は歩んでゐるのだ。美しさの中にひたり切つて歩いてゐるのだ。何と云ふ幸福、しきりと深い雪をわけた。そしてやがてテラースに出た。広い広い雪原、噴煙も近い。

空は晴れて行く、麓から晴れて来る。大澤もすぎた。岩の多い向ふ谿の傾斜を登り出した。空は見る間に晴れた。一面に被ふてゐた雲は忽ちに影をひそめた。晴れて行く晴れて行く、山の頂も麓もそして天鹽の遠い山脈も皎と冴え渡つた。麓の深い森林のくほみには残んの雲が低迷してゐる。ところどころに逃げ場を失つて迷つてゐる。すばらしい晴れ方だ。幸福を味ふ、と共に寒さはつものつて来た。しかし自分は元氣だつた。旭川の町の方を、自分を生んでく

れた町の方を見た。そこに今日母上はおはすのだ。母よ母よ。自分はそのとき心から母を戀ふた。そして自分を生んでくれた町を戀ふた。指先も耳も冷たく痛くなつて来た。氣が附くと手袋も帽子もつけなくて自分はゐた。『御母さん』自分はその時そうよんで見た。『私はいつもこうやつて山にひきずられて来てゐます。山以外には何物もないんです。そしてこうして指先も白く氷らしてゐます。耳も山から歸る毎におちて行くことも知つてゐます。しかし私にはこれ以上の幸福はないのです。山における限り私は原人でありそして健康に恵まれてゐるのです。私はこうやつて生きてゐるのです。こうやつてこの山上に幸福の絶頂に生きてゐるのです。何物よりも強く生きておるつもりなのです。御安心下さい。御母さんの子供はこうやつて戦ひながらも強く幸福に生きてゐるのですから。』

山をあやぶむ母を思つた。自分はそして母の爲に祈つた父のなくなつた後、十三年の余も自分達を育て下すつた母のために祈つた。そして母に山と云ふものを知つてもらつたことを喜んだ。母は今旭川に歸つてゐる。自分は更に自分達の第二の故郷である横濱を思つた。大震災にひどくこぼれた町を思つた。自分は切に母を戀ひ母の爲に祈つた。

ふとスプールをふりかへる。自分は高く登つてゐた。ス

ブルは美しく樹も何もないはだかの高原につどいてゐた足跡はさびしくつどいてゐる。一本の足跡をそこに見た。スタックも見える。十勝も見える。アシユベツも見える。さうした山々の頂に残したさびしい自分の足跡を思つた。そしてみじめだつたスキーの生活を思つた。一本でしかないスプール。そして自分一人のでしかないスプール。それがわびしくも美しくつどいてゐる。孤獨なスキー生活を思つた。さびしさは涙を誘ふ。たゞ山のみが、つくるころのない山の美のみが自分の氣持をひき立たせてくれた。思ひなほして靜かに登りはじめた。岩のスパルテに出る湯を噴く側を通る。火口の小屋からは人の姿がほつとりとあらはれて來た。自分の方を見てゐる。杖を振つてオーイとどなつた。しかし小屋の人はいらへもせずには鶴嘴をかついで黙々火口へのほつて行つた。自分は又動いた。廢墟でももあるかのように岩がつつ立つてゐる。十勝の噴煙は大きく渦をまいてのほつてゐる。太陽はものすごい逆光をなけ又霧が來た。山巔が包まれる。段々下つて來た。あれだけ煌いた町の彼方も麓の森も霧の王國に支配されて了つた。クルステの上を滑る。美瑛岳の大きな谿をのぞくことが出來た。すぐに引きかへす。上り氣味に霧の中を模索する。高低がわからない。火口に近づくとき硫黄の匂が迫つて來た。せきこみながら火口の小屋にもぐりこんだ。

人はるなかつた炭火がストロンチウムの燃える色とそつくり燃えてゐる。ひどく美しい。紫、鮮紅、赤と段々に褪めて行く、黄味がかかる。いつの間にかこのまゝの色にかへつた。そして茫然とつ立つてゐる自分を見出した。鍋にはさかした雪が湯になつてゐて、底には硫黄が黒く沈んでゐた。ふと古新聞にコーラーさんの顔が出てゐるのに氣付く。一月の末に亡くなられた先生なのだ。札幌にはじめてスキーをもつて來られた先生、スイス人、私の家はここのとこです。チユリツとの町の寫眞をさして云はれた先生、山好きだつた先生、この冬にも自分達の小さな群が十勝に入ると云ふとき一緒に行くかもしれないと云はれた先生、何となく涙ぐましい氣持になつた。

小屋を出た。十時だつた。霧ははけしかつた。大澤をまつすぐに下る。深い雪ですべらない。『オー、ルポアル』霧の中で自分はさげふ。スプールをかへり見てさげふ。白樺の森に入つた。『オー、ルポアル』長い間自分の情操を培つてくれた山、自然のあくまでも美しいことを知らせてくれた山、森の小鳥にすら新しい美の世界を啓示してくれた山、自分は白樺の冷たい膚に手を觸れてしきりと別れの言葉をくりかへした。女々しいかも知れない。だけどすべてと別れなければならなかつた。未練がましくサヨナラをくりかへす。温泉に歸つた。十一時だつた。

Sは先に山を下りた。堪え難い氣持を抱いて温泉のよき人達に別れをつける。重い荷を背負ふ。温泉の人々はいつまでも見送つてくれる。自分は樹林の間からしきりと帽子をふる。やがてすべては見えなくなつた。滑る滑る。すべてを忘れて滑る。なべて別れはさびしい。ことに山との別れはさびしい。とぶやうに橋道をすべつた。Sには停車場一里ばかり手前のところで漸く追ひついた。温泉の主人は馬橋をひいて町から山へ歸つて行くところだつた。女の子と小犬とがおとなしく乗つてゐた。別れる。山をふりかへる高原が光つてゐる。そこに自分のスプールはあるのだと思ふ。だけど見えるはずもなかつた。スプールは眼から消えてゐた。サヨナラを再び云つた。

停車場まで滑降一時間半、旭川行の汽車に乗つた。若い森林看守と一緒にゐた。

旭川の町は寒かつた。幌のかゝつてゐる馬橋に二人は乗つて、石狩川のほとりにまで飛ばした。ヌタツクはあかあかと全容をあらはしてゐた。桃色だつた。なつかしい思ひ出の山だつた。河霧はしきりと凍えた空氣の中に湧いてゐた。

紀元節の町。兵隊の町。水のやうに透明な夕。ひどく寒い道。停車場にひきかへす。町にはもう灯がきもつてゐた。母は停車場に自分達を待つてゐた。急行に乗る。汽車の中

で櫻餅を食ふ。もう春は訪れて來てゐるのだつた。

(一九二五・七・二)

——札幌を去る日の記念として——



スキー即下駄 下駄即スキー

君 一 生

異人、日中の國に來りその風俗習慣に驚嘆すること多きとか。中にも一大驚異として彼等の眼にまで目撃せらるゝことは日本人の穿く下駄の運用とこそあれ松方さんぢやなければ『いくら異人さんだつて急に下駄を穿かして砂利の上を歩いてど覽と云つたらきつと轉るに違ひない。所で日本人は小さい時からなれて居る故一向平氣である』と云つた様に一つの下駄と云ふものを穿くと云ふ事に已に彼に短あり我に長を見出して居る。彼等が我に持つ下駄運用の驚異、それは吾等が彼等のスキー運用に於て持つ驚異の程度と如何程の逕庭を有つならんか。

恐らくは、彼等のスキーを巧に運用することに對して我等が持つ驚異こそ、彼等が我等の下駄に對して持つ驚異に比し遙に劣るなるべし。それはスキーは雪の上のみ穿かるゝに反し、下駄は雪上さ云はず、地上と云はず我等が常に穿き慣ればなり。今更云ふまでもなく日本の下駄と比較するに西洋の穿きものは靴である。下駄と靴とこそ良き比較にこそなれ、スキーと下駄とは比較するに、その得失差異の多きを知るものである。されど我が云はんとするは下駄、スキーの本質の得失にあらずして、その運用の差違にこそあるなれ。

我等否思いやひを同じうする輩ともにして『Dunder des Schnee schuh』を見たる者更に又ノールウエーのインタアナシヨナルスキーコンテストのフィルム寫眞を見たりし者、凡べて畫面に活躍する外國のスキーランナーの巧なるスキー運用にこそ驚異せざるはなかりならん。げにさほど彼等のスキーは我等の穿く下駄的に上手に巧妙うまいに穿かれてありし。

此處に面白きは我の下駄に持つ運用の妙は幾百年來の習ひ性なりしものにて、彼等のスキー運用の妙はそれ幾何の年こそ經たるぞ。と觀するに北歐洲に於ては聞くなりくは數百年との事、南歐洲にて僅々三〇年前後とか。されば吾等如き者の見るにても北歐洲の一流スキーランナーと南歐洲のスキーランナーとの間に可成り隔りを知るは、さこそと思はる。

さて更に此間に我を引合せ見んか、口惜しとて齒はしりすると北歐洲に劣ると云はるゝ南歐洲スキーランナーにすら近寄れぬ様こそ悲しと云はんよりは情なき次第ならずや。我の遙かに彼に及ばざるはスキー地の設けやら、スキーの普か

らざるを、口さがなき人々かこつなれど
そは大なる誤りにて、我の及ばざるは
寧ろ下駄にして齒なき下駄穿く異人さん
の歩みにありと云ふべけれ。

○一つはフィンランドの話で、一つはス
ウイスの話である。勿論何れもスキーに
關係深い否スキーが彼地で下駄化するま
での挿話的な話である。

北歐では軍人さん達が主としてスキー
を牛耳つて居ることはノールウェー、ス
ウエデン、フィンランド等の國々のスキ
ー年刊を見てもすぐ判ることであるが、
所て夫等の兵隊さんには勿論現役も居ら
うし、豫備、後備になつて居る在郷軍人
さんも混つて居るやうである。その在郷
軍人達の作るスキークラブの人達が、田
舎青年の手間仕事にスキーを作らせて、
そしてそれを都會の大きなスキー商店に
賣つて團の資金を作つたり、又幾分の報
酬を與へてスキー製作を奨励して居るん
だ相である。それは丁度我が國で各地の
在郷軍人團が、田舎なら田舎の團員に片
手間仕事として「ワラジ」や「ナツ」を
編ませるやうなものである。夫れ故こち

らの田舎の人が草鞋を自分で作つて自分
が穿く様に、アチラでは田舎の青年が自
分の手で作つたスキーで大會に出場する
様なことがあるらしい。それ程スキーな
どは金をかけずに安價な製作で自分の体
に適す、最も穿き心地の良いスキーを作
るらしい。一つの雪國交通機關の實際的
製作奨励の方法、これがフィンランドの
スキーが下駄化するまでに嘗てありし話
である。

スウイスのスキー奨励の話とは、こち
らはスキークラブが矢張り主になつて仕
事をして居る話だが、主体となるクラブ
が各地のクラブから金を募つたり、スキ
ーの破損したのや、古いものを集めて、そ
して夫等から使用に耐え相なものを選ん
で子供のスキーを作つたりして貧乏でス
キーを買へない子供にくばつて居るとの
こと、それを數年前から實行して今日で
は、雪の地方で學校に通ふ子供は皆スキ
ーを持つて居る相だが、未だん／＼足りな
い相であると云ふことである。これまで
せねばなか／＼スキーも深い田舎にまで
利用されまい。

北海道邊でも僕達の先輩や友人によつ
て冬季スキー登山を試み田舎へ行く度に
スキーの實際的利用の價値や、都合の良
いこと、又容易に作り得るゝことなど
を教へては歸つて来て居る故か、同じ旅
行に出掛けた連中が歸つて来てはもう前
に行つた連中の通つた土地で子供がスキ
ーを穿いて居たことをよく話して居る。
そのお手本が昆布邊の小學校の子供が見
せて居る。早くかうした工合に日本の雪
國と云ふ雪國でスキーが利用せられて、
夏なら下駄、冬ならスキーと云ふ調子に
考へられて、スキーが下駄化して呉れた
らと考へられてならない。町のスキーが
十圓單位でなんか賣られて居るから贅澤
品披ひにスキーがされたのも無理がない
政府の無理解を口説くよりは、早くスキ
ー即下駄の氣持をお役人に持たせねばだ
めであらう。クラブで資金の有り余る様
なところがあつたら一つスウイス邊の眞
似でもしたら如何であらう。今の小學生
が早く大人にならねば、日本のスキーも
國際的になるには未だ遠からう。

春の燕岳へ

成瀬岩雄

春の槍に登つて槍澤と上高地で遊ぼうと思つて四月二日に東京を立つて牧に向つたが、生憎その日から雨や雪が降つて籠城を餘儀なくされてしまつた。何しろ相手が永年の希望の雪の槍ヶ岳なので可成周到な仕度で來たのに空しく引返すのはつまらないので、人夫の虎十の云ふ通り豫定を變へて燕岳に向ふ事に決めた。燕岳から見た槍から立山に續く峰々はどんなにいゝだらうと思ふとたまらなくなつた。四月五日、牧の寺島さんの家を出たのは午前十時近くであつた。有明に廻つて夏路を歩いて中房に向ふにはあまりに平凡らしいので浅川山の裏の多峠を越えて信濃坂に出るから中房に向ふ事になつた。牧から峠まで樂な登りでそれから信濃坂まで二里は降る一方なのでズット面白かつた。牧を出る時水氣タップリの重い雪が降つてゐたのにヤセオの平に來るともう冬の様な雪でサラ／＼とリュックにか

ゝつて來る。十二時にやつとスキーを穿き、アザラシの皮をつけて登つた。登るに従つて雪はよくなるばかりで正月頃東北などで見る様な粉雪に變り四月とは思へなかつた。寒さも大分加はつて來たので手袋を入れ、スキー帽を下して耳を隠して進んだ。ピッケルとスキーの杖を一本づつ兩手に握つて静寂の境を行くのは、なんだか嬉しくてたまらなかつた。時々樹木の切り開かれた様な所があると、鳥渡ス井ングをやつたら嘸粉雪が舞ひ上つて氣持がいゝだらうなどと思つたけど肩には可成重いリュックがあるので思ふ様にもならなかつた。人夫は輪カンヂキを穿いて歩いて來るが度々膝まで没しながら雪の中を泳いでゐるので遅ればかりの雪がオダングになつて澤山列を作つて谷の方に轉がつて行く。全く冬の雪だ。行手の多峠がサラサラと降る

雪を通して見え出したのは二時半頃であつた。宮の平に着いたのは三時半であつた。虎十の豫定では此所へは二時に着きたかつたのであつたけどカンデキとスキーとは如何しても歩調が合はないので無理もない。

宮の平から先は峠までは八町程であるけど、ちよつと急な登りで深く樹木が繁つてゐるので相當な苦心を續けたがどうか峠の頭に出られたのは丁度五時であつた。僅の八町ばかりの所を二時間も費してしまつた。寒さは宮の平よりは高いせいか猛烈に激しく、三十分間で食事をしたりアザラシを外したり、その他すつかり降る用意を調べた。手袋を外してビツケルを握ると手に氷り付くので驚いた。嚴冬としか思へない。アザラシもやつと外してすつかり滑降の準備をした。粉雪は音もなく降つてゐる靜かなものだ。友のO君が眞紅な指で雪搔きを握つてスキーの雪を落してゐるのを助けて毛の手袋を重ねていよいよ峠を下つた。之から信濃坂迄唯滑ればそれでいゝのだ。雪は案外深いけど慎重にボーゲンで進むと膝まで粉雪が舞ひ上つてこんな氣持のいゝ事はない。今は唯滑るばかり。所々廣い所を見付けては人夫を待つ間に重いリュックサックに振られて倒れそうになりながらテレマークをやつたりなどして待つたうつかり轉ぶと重いリュックのお蔭で顔なんかヴントばかり雪の中に突込むので安全第一を守つてボーゲンばかりで

進んだ。その内日はすつかり暮れてしまつたので皆急いどうせ今晩はもう中房へは行けませんから信濃坂に泊りませうと虎十が云た。暗くなると凸凹も判らないし路も判らなくなつて大きな山に馴れない僕等は不安に思つたけぎ雪の山には精しい虎十があるから大丈夫だと思ふと安心も出來た。ふと友の聲が聞える。『月が出た、月が。』成程自分の影が雪に映つてゐる。振り返ると峠の邊りに月が如何にも淋しく光つてゐる。僕は思はずビツケルを振り上げて喜んだ。何んだか嬉しかつた。スプールの月の光に照らされて實に綺麗だ。ビツケルで木をたゝくと粉雪が散つてそれが月の光で照らされて何んとも云へない美しさだ。青白い様な銀の様な粉雪が音もなく樹木から舞ひ落ちる様は本當にどう説明してよいのかあんまり美しくて唯嬉しいより他に何も云へなかつた。平和の極み、靜寂の極み、莊嚴の極みである。眼深に被つたスキー帽をまくり上げてこの偉大な自然の嘯きに耳を傾けた。時々雪に深く没しながら苦戦を續けて來る人夫の虎十も嬉しそうにいゝ月ですなあと足を止めた。如何にも嬉しそうに、先刻まで吹雪の中に惡闘しつゝ暗くなつたからと云つて僕等に色々注意を與へて心配してゐた虎十のその嬉しそうな顔を見た時は尙ほ一そゝう僕は嬉しかつた。『もう安心です』と彼は云ふ僕は彼を絶對信頼なので安心出來た。その内にスキーは又滑り出し

た。青白い光りを浴びながら二本のスキーは粉雪を破つて軽く進んだ。重いリュックもこの時は軽かつた。暫くすると信濃坂の人家の燈が見えた。遙の彼方にチラ／＼見えた之も亦疲れ切つた友が見付けたのだ。心は思はず燈火へと急いで歩巾を廣く元氣百倍して信濃坂へと急いだ。八年前信濃坂に來た時は茶屋一軒しかない本當に淋しい所であつたが今は立派な橋もあれば大きな小屋も澤山あり、人は澤山ゐてすつかり變つてしまつたのに驚いてしまつた。少しは山の様な感じはしたけれど豫想に反した。その夜はその古い茶屋に一夜を乞う事になつた。僕の大好きな爐に足を投げ出して障子の破れ目から外を眺めると大きなひよる長い木の林が月の光に照されて凄い影を投げてゐた。明日の事もあるから云つて可成ガン張つたけど、どうしても入れと茶屋の人が云ふので野天の風呂に入つてから熱い炬燵に入つて寝た。實に神祕的な景色でいゝと風呂に入りながら思つた峠での可成激しかつた労働の事を思ふと『あれだけガン張れる様になつたのか』と思つて嬉しかつた。

四月六日。すつかり今日は晴れて實に氣持がよかつた。人夫の都合で今日は中房までなので信濃坂を出たのは九時半であつた。一町程行つてスキーを穿いたけど途中雪の消えてゐる所が多くて度々スキーを外したりなどしてあまり面白くもなかつた。その上ブツシュの中を歩いてゐると靴

についた氷を引掛ける金具が筈に引掛つて度々轉倒しうになつて随分弱らされてしまつた。温泉の手前で大天井の續きらしい山が眞白に光つてゐるのを見て嬉しかつた。温泉には番人が一人ゐた。幸ひ僕等のよく知つてゐる人であつたので座敷などに通されて夏と全く違はぬ歡迎振りであつた。歡待して呉れるのを不平云ふのではないが爐の廻りにでも案内して呉れりやもつと嬉しかつたのだけだ。

午後附近のスロープに練習に出掛け、明日のコースも見て來た。温泉附近は雪はまるでなく夏の通りであつた。

夜は月と無数の星が輝いてゐた。スキーに海豹をつけたり魔法體に紅茶を入れたりなどしてすつかり用意を調べて眠りに付いた。明日は激しい労働もあるから今晚は湯にも入らず炬燵にも入らずに床に入つた。いよく明日は雪の燕岳へと思ふと……。

四月七日。豫定の如く、希望の如く、いゝ元氣になつた一人の人夫は都合で行けないので、虎十と〇君と三人で行く事になつた。夏路はとても急で駄目なので合戦澤を登つた。そして途中で夏路の比較的スロープの緩い尾根に出る事にした。澤は雪が非常に固い上に雪崩の後なども澤山あり肩にはスキーを擔いでゐるので可成歩きにくかつた。ですぐシユタイグアイゼンを穿いて登つた。木の影には一昨日降つたばかりの粉雪がその儘残つてゐて足が深く没して

困つた。でもさうにか登りつめてから左の方に登つたら夏路の尾根に出た。玉なす汗を先づ拭ひ取つてスキーに穿き變へて登つた。温泉を七時半に出て此所まで二時間半掛つた。尾根はあの通り瘠せてゐるので、デックザックを幾度もした。大天井や東天井が樹木の間から見えるので僕は時々休んではその美しさに見とれた。松本平の左の方には妙高らしい山が桃色に見えた。南アルプスも霞んでゐた。夏見る色とまるで違ふのが何より嬉しい。尾根は案外長く未だか未だかミ首を長くしてキツクターンの度に上を見た。パンや肉や紅茶で元氣を付けて登つた。合戦澤小屋は屋根を僅かに出してゐた。之から上は林は疎らになり尾根もすぐ脱せられると思うと直は元氣も出た。キツクターンを十二三回するとやつと廣く眺望の利く所に出た。槍が凄くビークを見せてゐる。夏ならば路は此所から尾根の右側に出て槍など勿論見えないのだが圖らずもあのドス黒いビークを眺る事が出来た。小槍が左の方に可愛く座つてゐる。燕岳は外國邊の山を偲ばせる様な有様で聳えてゐる。之から肩までは相當スキーの使用も時間が掛りそうなので又アイゼンに穿き變えた。スキーを深く雪の中に立て、ピッケルとザイルを持つて肩に向つた。有明山の方から黒い雲が來たので案じたけど何時の間にか又カラリと晴れてしまつた。登るに従つて槍が大きくなり稔高までが顔を出して來た。

アイゼンの八本の爪は快く雪の中に食ひ込んで確かにスキーより早い。ザイルを肩にシエンクのピッケルを握つて稔高や槍の凄いビークに驚嘆しながら登つて行く時の嬉しさと來たら又何とも云えなかつた。あの肩まで行けば眼前に大きなバノラマがあるのだと思ふと足も早まつて來る。何しろ嬉しくてたまらなかつた。スキーデイボットから三十分掛つて二時にやつと肩に着いた。豫想を裏切らずあの凄く純白なバノラマだ。西洋人形に冠せる様な帽子の形をした笠ヶ岳。双六に續く尾根が判然と輝いてゐる。黒岳やその附近のあの夏見る砂山は今全く白い綿でも引きつめた様にフツクリとしてゐる。藥師が奥の方から黒い岩を見せて聳えてゐる。立山は日本アルプス中の霸王の如く大きなスロープを見せて黙然と對峙してゐる。皆ども之も矢鱈に直滑降でブツ突飛したら氣持がいゝだらうと思ふ様な凄くスロープを見せてゐる。殊に鎌尾根邊から黒岳邊りのスロープと來たらたまらない。夏見ではそうでもないのに今見るとどうしてあんなに誘惑的なのかしらん。飛彈側からは凄く風が吹いて來て時々廻れ右をしなければならなかつた。小屋は大きな雪庇の下になつてゐて危くて寄り付けそうにもない。何時何所で見ても雪庇の影と云ふものはいゝものだ。風があまり強いので頂上へ行けないので肩で引返す事にして再びあのバノラマを眺めて見た。何時かは是非あ

の邊にもスプールを印したいと思つた。死んだ喜作なんかはあんな所を平氣で鐵砲を擔いで歩いたのだから凄しい。あの丸つこい優しい爺さんの歩き振りがあの雪の山に見られたら面白いのだが。何日まで立つても彼の可愛い、姿は僕の眼から離れないがあの雪の山を眺めて喜作の鈴鹿を追ひまくる姿と恰好を想像して見ると今更ながら彼の死は痛ましい。

寒さに慄えながら急いで邊りをカメラに治めて去らなかりやならなかつた。アイゼンのシヨックを氣持よく感じながら急ぎ足でスキーデイボットへと向つた。残りの飯を食つてアイゼンをリユックの底に入れてスキーを穿いた。時に三時。少々曇つて来たけど槍は未だ凄しいピークを見せてゐる。あの黒金の様なピークにシエンクのピツケルを振つて何時かは登りたいと思つた。雪は全く硬くなつて仲々ス井ングが出来ない。仕方がないので一々キツクターンで下りねばならなかつた。でも矢張り下りは早く合戦澤小屋まで何時の間にか来てしまつた。この邊りは日中あまり日が當らないので雪はクラストになつて居らず一昨日の雪がその儘なので粉雪を振り上げながらス井ングをして實に痛快であつたがすぐ尾根が狭くなつてボーゲンより他に危険で出来なかつた。登る時はどうしてこんな所を下れるかと思つて内心心配してゐるだけど下りて見れば何んでもなく愉快に

滑れた。唯始終エツヂを使つてゐなけりやならなかつた。温泉の青い水のプールや屋根が箱庭の様に小さく樹林を通しつたのだ。この時は何んとなく嬉しかつた。雪の燕岳に登つて行くのだと思うと、とても嬉しかつた。大天井岳の連山はすつかり黒い雲に包まれてすつかり姿を隠してしまつた。尾根を唯滑つて行けばそれで楽しいヒユツテに歸れるのだと思ふ嬉しくもあるし足も唯無雜作に進んだ。降りのは夏路の急な所からスキーを擔いで下りた。温泉に著いたか知らないけど嬉しくてたまらなかつた。雪の山は實際遠ざけ難いものだ。夜は色んな手柄話して時の立つのも知らず床に入つたのは十時であつた。外は何時しか吹雪と變つてゐた。

最後にどなたかの御参考の爲に時間の記録を記して置きました。

四月五日 (降雪) 牧發午前十時——ヤセオノ平(十一時半)——午後一時スキーを穿く——宮ノ平(三時半)

——多峠(五時)——信濃坂小屋(八時十分前)

四月六日 (晴天) 信濃坂(九時半)——中房温泉(十二時二十分)

四月七日 (晴天) 温泉(七時半)——夏路ノ尾根——合

戰澤小屋(十二時半) スキーデイボット(一時半)——
燕岳の肩(午後二時半)——デイボット(三時)——温泉
(五時)

案内の渡邊虎十は非常によく親切にやつて呉れて安心しました。スキーで中房に行かれる方は有明から夏路を行か

彙報抄録

Alpine Journal No. 229.

山と云ふもの、岩と云ふもの乃至は氷と云ふ様なものに別段深い交渉の無い人々にさへも、世界的に著名の事實として知られて居り、而して世界的の山岳家が所謂 Expeditionを試みつゝあるものにヒマラヤ登攀とそしてカナデアンロッキー行がある。ヒマラヤ山系の最高峰エヴェレスト登攀の記録は已に英國山岳會の錚々たるメンバアによつて前後四回に拂り試みられたれど科學の全知を以てしても自然の偉力に抗するを得ざりしか、遂に世界的二山岳家——好漢マロリー、アーヴィングの命は消ゆるが如く造化の神靈の誘ふ死の殿堂に遠く霞み行きし、悲痛の記録、夫れは

吾れるより牧から多峠を越して行かれた方が遙かにいゝと思ひます。牧を朝早く出れば樂に中房まで行けます。燕岳に登る足馴しとしても多峠は登り下り共に恰好な所だと思ひます。(終り)

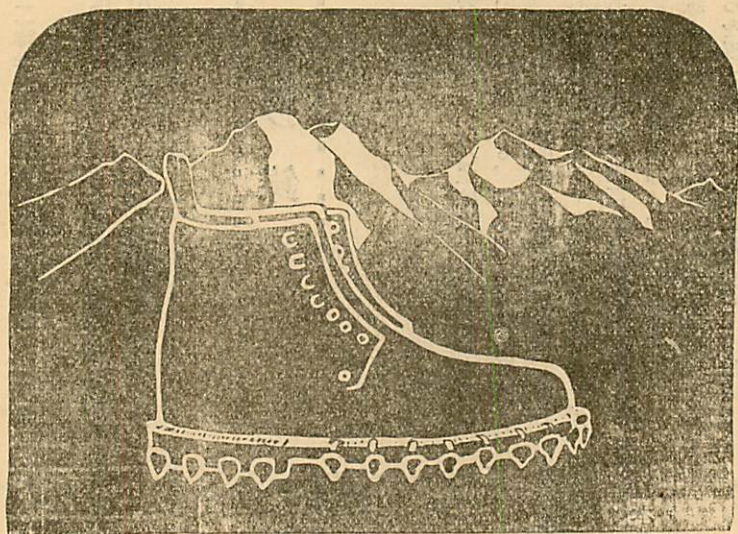
等がエヴェレスト行の報するところによりて知れる記憶新なる事實なり。その二氏を失つてからの新なる記録をして同行者の報告に感想が随分前號に續いて掲載されてある。更に最近各國一流山岳家の注目となつて居るカナデアンロッキーのことについても記されてある。(ひろた生)

寄贈

Aurub Gellius, From Alpine Snows to
Yulano Fires.鐵道省より。

日本アルプス登山要項.....信濃山岳會より。

テ於ニ會覽博藝工產畜回二第
領受牌金賞等一



靴一キスと靴山登

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、O. G. S. 系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

大正十四年七月三十一日印刷

大正十四年八月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 相 川 正 義

印刷兼 發行者 廣 田 戸 七 郎

札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No 51. Aŭgusto. 1925. Sapporo. Japanujo.

MIMATSU
SKIING, MOUTAINEERING
AND
CAMPING OUTFIT



美滿津特製

スキー・山ノ道具・及ビ
キャンピング・アウトフキツト

合名會社

美滿津商店

東京・本郷・赤門前

大正十四年七月三十一日發行
大正十四年七月三十一日印刷
大正十四年七月三十一日納物
大正十四年七月三十一日認物
大正十四年七月三十一日納物
大正十四年七月三十一日認物
大正十四年七月三十一日納物
大正十四年七月三十一日認物
大正十四年七月三十一日納物
大正十四年七月三十一日認物

山ノスキー
第五十一號

定價參拾錢